『聖ブランダンの航海』における中途半端な天使

伊　藤　了　子

「聖ブランダンの航海」は地上の天国を求める航海物語である。聖ブランダンは生きている間に「聖人に約束された地」あるいは「地上の天国」を見たいと思い，弟子17人と共に航海に出る。そして7年目に目的を達し帰還する。この物語はアイルランドの imrama「航海物語」，キリスト教的 vision「見神」文学，そしてギリシア・ラテンの odyssée「航海奇談」，その他さまざまの要素を合わせ持つ興味深い作品である。中世ヨーロッパの至る所でこの物語が読まれたことは，その写本の数と分布によって明らかである。ラテン語散文 Navigatio Sancti Brendani Abbatis の写本は現在発見されているだけでも10世紀のものから17世紀のものまでその数は120に達する。そして同じ中世にこの Navigatio Sancti Brendani Abbatis は，フランス語，ドイツ語，アイルランド語等さまざまな土地の言葉に翻訳された。

さて，地上の天国を求めて航海に出たブランダンとその一行は，海上でさまざまな試練に出会う。目的地にたどり着くまでの7年間，毎年同じ場所で，彼らは Pâque「復活祭」と Noël「クリスマス」とを祝う。毎年同じ場所でといっても，航海は全て風と波つまり自然にまかせられる，そしてここでは自然は神の意志であるから，全ては神の意志によるものである。ブランダンたちは鯨の背の上で Pâque を祝った後すぐ「小鳥たちの島」に行き，Pentecôte「聖霊降臨節」の8日目まで約2ヶ月をそこで過すのである。ブランダン一行は7年の航海の間に海上および島々でさまざまの善と悪の見本を見せられる。そし

て彼らが出会う者たちがすべて善であるか悪であるかはっきりしている[1]のに，この島の小鳥たちだけはそれが明確でない。善なのか悪なのかはっきりしないのである。この小鳥たちは，実はサタンが天から追放されたとき一緒に墜落した天使である。カトリックの伝統では，天使は二つに分けられる。Les bons anges「良い天使」と les mauvais anges「悪い天使」であり，後者は les anges de ténèbres「悪魔」あるいは les anges déchus「墜天使，悪魔」とも呼ばれる。この悪い天使というのはヘブライ語で「敵」を意味する Satan「サタン」およびサタンと同じ罪を犯した天使たちのことであって les démons「悪魔」とも呼ばれる。サタンと天使たちの墜落の理由は「うぬぼれの罪」であると一般に考えられている。彼らは大胆にも自分たちは自分たちの創造主と同じ位偉大であると思った，あるいは神よりも自分を愛したのである。そして彼らは神に反抗した。良い天使は自分よりも神を愛し，神の敵と戦った。サタンは戦いに敗れ，彼に加担した者たちと共に l'enfer, l'abîme「地獄」に落ちた。ブランダン物語の中でもこのサタンと悪魔たちは地獄の住人として登場する。それでは一体このもと天使であって，サタンと共に落ちた小鳥たちはなぜ地獄に送られずに，この島にいるのであろうか。この島はどういうところなのか，なぜ小鳥たちは天から追放されたのか，そして彼らの罪は何なのか。これらの疑問を，ブランダン物語の中のいくつかの versions（ここでは特にラテン語，アングロ・ノルマン語，古フランス語の versions を取りあげることにする。）を比較検討しながら明らかにしていきたい。これが本論文の目的である。

なおこれらの versions は大きく次の二つのグループに分けることができる。I) Navigatio Sancti Brendani Abbatis（ラテン語散文）およびそれらの忠実な翻訳であると考えられる古フランス語散文と，古フランス語韻文，II) Voyage de Saint Brendan（アングロ・ノルマン語韻文）そしてこの Voyage de Saint Brendan の翻訳であるラテン語韻文。便宜上 I を Navigatio 系，II を Voyage 系と呼ぶことにする。テキストには Navigatio 系として Carl Selmer 版のラテン語散文 Navigatio Sancti Brendani Abbatis, Wahlund 版の古フランス

語散文 (A) De saint Brandainne le moine と (B) De monseigneur saint Brandan および Jubinal 版の古フランス語韻文 De Saint Brandans を使用し，Voyage 系として，Waters 版および Short 版のアングロ・ノルマン語韻文 Voyage de Saint Brendan, と Martin 版のラテン語韻文を使用する[2]。

島の様子

島の描写といっても，あるのはただ泉と木だけである。その木の描写が versions によってかなり違っていて面白い。Navigatio 系はどれも簡単に取り扱っている。たとえば，Navigatio Sancti Brendani Abbatis では

> Erat autem super illum fontem arbor *mire latitudinis* in girum, *non minus altitudinis*, cooperta auibus candidissimis. In tantum cooperuerunt illam ut folia et rami eius uix uiderentur. (*Navigatio*[3] : Caput 11-16~18)
>
> (その泉の上には木があった。周囲に見事に枝を張り，高さも広がりに劣らない。そして白い小鳥に被われている。余りにもその数が多いので枝も葉も殆んど見えないくらいである。)

一体この木の高さや広がりは何かを意味するのであろうか。するかもしれないが，なによりもブランダンが不思議に思うのは，つまり常でない様相を呈しているのは木自体ではなく，その木にとまっている白い小鳥の多さである。ところがこの木に見事に意味を持たせたと思われる version がある。それはアングロ・ノルマン語の Voyage de Saint Brendan の次の一節である。

> Al chef del duit out une arbre
> Itant *blanche* cum marbre,
> E les fuiles mult sunt ledes,
> De *ruge* e *blanc* taceledes.
> De haltece par vedue
> Muntout l'arbre sur la nue ;
> Des le sumét desque en terre
> La brancheie mult la serre
> E ledement s'estent par l'air,

Umbraiet luin e tolt l'esclair,
Tute asise de *blancs* oiseus
Unches nuls hom se vit tant beus. (*Voyage* v.v. 491-502)

（その木は大理石のように白く，葉は広く赤と白の斑いりである。その木は雲の中に抜けるほど高く，梢から下までぎっしり枝が茂り，空中に広く伸びている，そして遠く陰を投げかけ，光を遮っている。枝にはぎっしり白い小鳥たちがとまり，これほど美しい木を人は今まで見たことがない。）

木の高さ，色，様態，美しさ，全て超自然的である。ブランダンが不思議に思うのはこの木と小鳥たちの美しさのためである。ところがこの木はただ美しいだけではない。この木の描写にはポジティフな意味を持つ要素とネガティフなものとが混在しているのである。まず色に関して，白は一般に潔白，無垢，純潔を表わす。では赤はどうか。赤は死を意味することがある[4]。木の白さ，小鳥の白さ，木の葉の白い斑は潔白を，木の葉の赤は死を表わすということになる。そしてこの木の葉は白と赤とを同時に持つので，木の葉によって潔白と死とが共存していることが表わされると考えられる。どうして死か，どうして潔白かは後の「墜落—罪と罰」の章で再び触れるつもりである。ここでは，この死がこの木の表わしているもう一つのネガティフな性格と重要な関係があることを指摘しておきたい。そのネガティフな性格とは，「この木が周囲に陰を投げかけ，光を遮っている」ということである。この陰は安らぎを与えるための陰ではない。光というのは神の光のことである。神が光にたとえられることはよくある。つまりこの木は神の光を遮っている。そしてこの木自体は「白い」のであるから，この木が神の光を遮っているのは悪のしわざによるのではなく，神自身の意志によってである。そして小鳥たちには神の光が届かない。これは小鳥たちにとって死にも値することなのである。反面，このポジティフな要素である高さ，美しさは神の恩恵を表わすと考えられる。そしてこの恩恵のためにここは Oiseus li Paraïs (*Voyage* v. 546)「小鳥たちの天国」と呼ばれる。しかしここには本当の地上の天国，つまり7年目にブランダンたちが見る天国には絶対ないもの，天国にはあってはならないものが存在している。それ

はあの「陰」である。したがってここは本当の「地上の天国」とは性質が違っている。

ラテン語の韻文はアングロ・ノルマン語の Voyage de Saint Brendan を手本にしたといわれているが，この木の問題はそこでどう取り扱われているかみてみよう。

Arbor marmor Parium　superans *candore*
Parte ripe cernitur　in secretiore,
Lata densans folia :　*bino sculpta flore*
Liliorum gloria　*rose cum rubore.*
Stipes stupor nubibus　arboris elate.
Ramos ex se sperserat　spaciantes late
Longos et innumeros　plenos novitate,
Avibus nitentibus　*nivis claritate.*　（ラテン語韻文，スタンザス 90, 91）

（Pares の大理石より白い木が岸から遠くにきわ立っていた。茂った広い葉は百合の栄光とバラの赤をあわせ持つ二重の花が彫られている。驚くほど高いその幹は雲まで届く。幅広く枝を伸ばし，その枝は長く，無数で比類ないもの。そして雪のように輝く小鳥たちでいっぱいであった。）

これは非常に装飾的，詩的な文章である。ここでは美を強調する表現が多く使われている上に，アングロ・ノルマン語の Voyage de Saint Brendan のあの「陰をおとし，光を遮る」という文章がみられない。したがって，このバラの赤がここで死を表わすとは考え難い。ここではただ美しさだけが描かれているのである。その美しさのためこの version もこの島を Paradisus noster「小鳥たちの天国」と呼んでいる。

以上が島にある木の様子である。もう一つこの島がどんなところかを表わすことばがある。それは，この島には苦しみというものがないということである。これは全ての versions に共通である。結局この島は Navigatio 系，Voyage 系の全ての versions において地獄でもなく，天国でもない，地上の島なのである。

小鳥たちの素姓

ブランダンは小鳥たちが何者なのか知りたいと思う。彼の願いが神によってかなえられる。小鳥の一羽が降りてきて人間のことばで説明する。Navigatio 系では，その小鳥は Nos sumus de illa magna ruina antiqui hostis (*Navigato*: Caput 11, 35) と言う。つまり，antiqui hostis とはサタンのことであるから，サタンが墜落したとき一緒に落ちた者であるということである。それに対し Voyage 系は Angele sumus, E enz en ciel jadis fumus; E chïmes de halt si bas... (*Voyage* v.v. 521-523) (我々は天使である。かつては天にいたが落ちた)という。先に挙げた Navigatio 系では，小鳥たちは自分たちが天使であるとは言わない。Navigatio Sancti Brendani Abbatis は常に言葉使いに関して慎重である。しかしたとえ天使とよばなくても，「サタンと共に落ちた」というだけで，かつて彼らが天にいた者であることは明らかである。したがって Navigatio 系でも Voyage 系でもこの小鳥たちはかつて天使であったということになる。なぜ彼らは墜落しなければならなかったのであろうか。

墜落—罪と罰

彼らの墜落の理由は罪である。この罪は二重構造になっていて二つの罪がある。一つは小鳥たち自身の罪，もう一つは小鳥たちの罪の原因となった罪である。その発生年代順に，後者から各 version の中でどう表わされているかをみてみよう。Navigatio 系では，

> "Nos sumus de illa magna antiqui hostis, sed non *peccando in eorum* consensu fuimus." (*Navigatio*: Caput 11-36,37)

という文の中で「彼ら（敵であるサタンとその仲間）の罪」としか表わされていない。強いてこの表現の中に罪とは何かを読みとろうとするなら antiqui hostis「神の敵」であることが罪である。ただし，Navigatio 系の versions のうち Navigatio Sancti Brendani Abbatis の写本AとK[5] および古フランス語散文 (B) では少し先で彼らのことを superbi, orgueilliex「うぬぼれた者

たち」と呼んでいる。つまりこれらの versions では「うぬぼれの罪」を明示していることになる。

この「うぬぼれの罪」は，アングロ・ノルマン語の Voyage de Saint Brendan では，次のようにもっとはっきり示されている。

E chaïmes de halt si bas
Od *l'orguillus* e od le las
Par *superbe* qui revelat,
Vers sun Seignur mal s'eslevat.
Cil fut sur nus mis a meistre,
De vertuz Deu nus doust paistre ;
Pur oc que fut de grant saveir,
Sil nus estout a meistre aveir.
Cil fud mult fels par *superbe*,
En desdein prist la Deu verbe. (*Voyage* v.v. 523-532)

（うぬぼれによって主に反抗し，立ち向った傲慢で不幸な者と一緒に，我々は高いところから落ちた。その者は我々の師となり，そして神の徳によって我々を導く筈であった。彼は博識であったので，我々は彼を師としなければならなかった。彼はうぬぼれにより神を裏切った。神の御言葉を軽蔑した。）

「彼」をして神を裏切らせたのは superbe「うぬぼれ」であったというのである。

これは，ラテン語韻文ではどうなっているだろうか。

Sumus cum Lucifero　lucidi creati,
Cetus quidam subditus　ejus majestati. (ラテン語韻文，スタンザス 95)

（我々は Lucifer と共に輝しく創造された。一頭の怪物が Lucifer の威厳にとって代った。）

文字通りでは何のことかよくわからない。Lucifer という名は，もともと金星にあてられた名前で，この星は l'étoile du matin「暁の星」，l'étoile de berger「羊飼いの星」，porte lumière「明星」とも呼ばれる。そうすると Lucifer という名と墜天使の話は次に引用するイザヤ書14-12～15の中で結びつけられる。

12 Comment es-tu tombé du ciel,
étoile du matin, fils de l'aurore
As-tu été jeté à terre,
vainqueur des nations?
13 Toi qui avais dit dans ton cœur :
"J'escaladerai les cieux,
au-dessus des étoiles de Dieu j'élèverai mon trône,
je siégerai sur la montagne de l'Assemblée,
aux confins du septenturion.
14 Je monterai au sommet des nuages,
je m'égalerai au Très-Haut."
15 Mais tu as été précipité au shéol,
dans les profondeurs de l'abîme. (ISAIE 14-12~15)

では怪物とは何か。怪物と墜天使の話が結びつくのは次に挙げるヨハネの黙示録 12-3,4 および 12-7～12 においてである。

Puis un second signe apparut au ciel : un énorme Dragon rouge feu, à sept têtes et dix cornes, chaque tête surmontée d'un diadème. Sa queue balaie le tiers des étoiles du ciel et les précipite sur la terre. (L'APPCALYPSE 12-3,4)

Alors il y eut une bataille dans le ciel : Michel et ses anges combattirent le Dragon. Et le Dragon riposta, avec ses Anges, mais ils eurent le dessous et furent chassés du ciel. On le jeta donc, l'énorme Dragon, l'antique Serpent, le Diable ou le Satan, comme on l'appelle, la séduction du monde entier, on le jeta sur la terre et ses Anges furent jetés avec lui (L'APOCALYPSE 12-7～12)

ユダヤ教の伝統では，蛇あるいは竜は悪の力，つまり神および神につかえる人間に敵対する力を象徴していた。したがってこの問題の二行は「Lucifer は善として神によって創造されたが，彼に悪が芽生えた。」ということを表わす。そして次に来るスタンザス 96 の Tumido servivimus「我々はうぬぼれた者に仕えた」という文によって，この悪が「うぬぼれ」であることがわかる。

以上のように，アングロ・ノルマン語の Voyage de Saint Brendan とラテン語韻文は，結局意味するところは同じであるのに，その表現法はこんなにも違っている。前者は理解しやすい説明文であるのに対し，後者は短かく，聖書を暗示する象徴的，詩的文章である。

次に小鳥たちの罪とは何かを考えてみよう。まず Voyage 系から始める。

Puis que out ço fait, lui servimes,
E cum ançeis obedimes ;
Pur ço sumes deseritét
De cel regne de veritét, (*Voyage*, v.v. 533～536)

（サタンが罪を犯した後も我々は彼に仕え，以前のように従った。そのために我々は真実の王国から遠ざけられた。）

Ei dum paruimus　post ausum peccati,
Cum ruente ruimus : （ラテン語韻文，スタンザス 95）

（Lucifer が大胆に罪を犯した後も我々は彼に仕えたので落ちる者《=Lucifer》と共に落ちた。）

このように Voyage 系は具体的にその罪を明示している。つまりサタンが罪を犯した後も以前同様にサタンに従ったということである。

それに対し Navigatio 系 versions の殆んどは Voyage 系のようなはっきりした理由を挙げていない。たとえば Navigatio Sancti Brendani Abbatis では，

sed *non* peccando in eorum *consensu fuimus*. Sed *ubi* fuimus creati, per lapsum illius cum suis satellitibus contigit et nostra ruina. (*Navigatio* : Caput 11-36,37)

（しかし我々は彼らの罪に同調しなかった。が，我々が創造されたとき，サタンが仲間と共に墜落したことによって我々も落ちた。）

ここでは，「同調しなかった」というのはサタンの仲間にならなかった，サタンと同じ罪を犯さなかったという意味に取ることができる。

古フランス語韻文と古フランス語散文 (B) もこれと同じである。つまり小鳥たちは「サタンの罪に同調しなかった」のにサタンと共に落ちたことで一致している。ところが同じ Navigatio 系の versions でも，古フランス語散文 (A) と Navigatio Sancti Brendani Abbatis の写本Aではこの箇所に次のような相違がある。

namque *mox ut simul* creati sumus peccando illius *omnino non contradiximus* (*Navigatio*：写本 A)

（実は，我々が創造されたときすぐに，我々はサタンの罪に完全には反対しなかった。サタンが仲間と墜落したために我々は墜落した。）

Mais *nous ne pechames mie ains nous i consentimes*・et *la ou* nous fumes crie *de la* par le caiement dou premier anemi auoecques tous ses sergans vint no dechaiemens （古フランス語散文(A)）

（しかし我々は全く罪を犯していない。ただ罪に同調しただけである。そして我々が創造されたところからサタンが仲間全員と共に墜落したため，我々は落ちた。）

この古フランス語散文(A)の中の consentimes「同調した」は具体的にはどういう意味なのか。そのすぐ前で「我々は罪を犯していない」と言っているのであるから，小鳥たち自身は「うぬぼれの罪」は犯していないことは確かである。そうすると，この「同調した」は Voyage 系のように「サタンが罪を犯した後も以前同様にサタンに仕えた」，あるいはサタンが罪を犯した後もサタンと仲良くしていた，あるいはうまく調子を合わせていたという意味にしか解釈できないように思われる。

以上要約すると次のようになる。神の敵サタンとその仲間がいる。versions によっては彼らの「うぬぼれの罪」が明記されている。そして小鳥たちは「神の敵」ではない。彼ら自身はうぬぼれはしなかった。つまり小鳥たちは神の敵とは全く違う別の集団である。そして神の敵は落ちるべくして落ちた。小鳥たちが墜落したのは，1) サタンが罪を犯した後も，それ以前と同様彼に仕えたから (Voyage 系の versions)，2) サタンの罪には同調しなかったが，サタンが墜落したから (Navigatio 系の殆んど全ての versions)，3) サタンの罪に完

全には反対しなかったから（Navigatio Sancti Brendani Abbatis の写本A），4）サタン（の罪）に同調したから（古フランス語散文(A)）である。2)以外は少なくとも墜落の理由がある程度はっきりしている。一体2)には理由はないのであろうか。理由がないのに落とされたのであろうか。サタンが墜落するとき生まれたので偶然一緒に落ちたのであろうか。全くの事故であるのか。しかし，「神の敵の墜落」とだけ言って多くを語らないで全てをわからせてしまうNavigatio Sancti Brendani Abbatis が，「サタンの罪に同調しなかったがサタンの墜落によって我々は落ちた」と言うとき，我々は「理由がないのに落ちた」と文字通りに取ることはできない。そこには語らなくてもわかる，読者のよく知っている思想的事実があったのではないかと思われる。これは仮定にすぎないのであるが，これを解く鍵になるのが上の 3）サタンの罪に完全に反対しなかった，である。つまり，「同調しない」だけでは不十分で，「神の敵」には完全に，積極的に反対し，神のために戦わなければならなかったのではないか。「敵にも加担せず，完全に反対もせず」というのがこの者たちの取った態度であった。神はこのような中途半端な態度を嫌われると次にあげる聖書の箇所は言っている。

> Je connais ta conduite : tu n'es ni froid ni chaud—que n'es-tu l'un ou l'autre ainsi, puisque te voilà tiède, ni chaud ni froid, je vais te vomir de ma bouche. (L'APOCALYPSE 3-15,16)

以上要するに，彼らの墜落の理由である罪はひとつに帰する。それは彼らが神を選んで悪と戦わなければならなかったのに，そうしなかったことである。Voyage 系の天使たちも，サタンが罪を犯したとき神を選ぶべきであったのに，そうしなかった。Navigatio 系の天使たちは，サタンの罪に「同調しない」までは良いが，神を選ばなかったことは罪である。結局どの version の小鳥たちも「神の敵」でもなく「神の味方」でもないという中途半端な態度を取った天使であるということになる。しかしその中途半端な態度のあり方は，上に示し

たように version によって違っている。

この相違が，彼らに対して与えられる罰にもあらわれている。「罪を犯した後もサタンに従った」となっている Voyage 系では小鳥たちはどんな罰を受けているのであろうか。

Pur ço sumes deseritét
De cel regne de veritét.
Mais quant iço par nus ne fud,
Tant avum par Deu vertud:
N'avum peine si cume cil
Qui menerent orguil cum il.
Mal nen avum fors sul itant :
La majested sumes perdant,
La presence de la glorie,
E devant Deu la baldorie. (*Voyage* v.v. 535-544)

（そういうわけで我々はこの真実の王国から追放された。しかし罪を犯したのは我々ではないので神の恩恵をこんなにも受けている。サタンと共にうぬぼれた天使が受けているような苦しみは我々にはない。我々の不幸はただひとつ。それは我々があの威光を，あの栄光の存在を，そして神の前のあの喜こびを失ったということだ。）

彼らが失なったものこそまさに良い天使たちが受けている至福なのである[6]。天使が，天使に与えられたこの至福を失なうことは天使にとって死にも値することではないであろうか。あの木の描写のところで触れた「赤＝死」および「陰」はこの不幸を指すのである。同じ Voyage 系のラテン語韻文はこの不幸について述べていない。

では Navigatio 系ではどうであろうか。「サタンの罪に同調した」となっている古フランス語散文 (A) だけを除いて，他は全て「神を見ることができる」となっている。これは良い天使に与えられた至福である。この箇所を Navigatio Sancti Brendani Abbatis でみてみよう。

Penas non sustinemus. *Hic presenciam Dei possumus uidere*, sed tantum

alienauit nos a consorcio aliorum *qui steterunt.* (*Navigatio* : Caput 11-39~41)

（我々は苦しみを与えられない。我々はここで神の存在を見ることができる，がしかし神に忠実であった者たちから遠ざけられた。）

要するに良い天使が受ける至福を彼らは失ってはいないが，良い天使の群からは引き離されたということである。ところが上の文の中の steterunt「残った，忠実であった」が fuerunt superbi となっている写本が二つある（Navigatio Sancti Brendani Abbatis の写本AとK)。それらは「うぬぼれた者たちから引離された，つまり悪い天使の群から引き離された」と言っているのである。Navigatio 系の他の versions もこの二つに分かれる。次の通りである。

(1) Ne sentons paine ne torment,
Et *Deu de ci veir poons,*
Mais compaignie n'i avons
U ciaus *qui el ciel demorèrent*
Quant li autre jus trébucièrent.（古フランス語韻文　v.v. 476~480）

（我々は苦しみも苦痛も感じない。そして我々はここから神を見ることができる。しかしサタンたちが落ちたとき天に残った者たちと我々は一緒ではない。）

Nous ne souffrons nule painne. Mais *le presenche diu ne poons veir.* Tant nous a il entrechangie de le compaignie des autres *ki i furent*（古フランス語散文(A)）

（我々は如何なる苦しみも受けない。しかし神の存在は見ることができない。同様にそこにいた他の者たちの群れから神は我々を遠ざけた。）

(2) ou nous soumes sanz paine et *pouons ueoir la presance de lui.* Einsi nous estrania de la compaignie des autres *qui furent orgueilliex*（古フランス語散文(B)）

（ここで我々は苦しみがなく，神の存在を見ることができる。同様に神はうぬぼれた者たちの群れから我々を引き離した。）

要するに，Navigatio 系では「罪に同調しなかった」となっている versions の小鳥たちは (1) 良い天使の受ける至福を失っていない，しかし良い天使の群

れから引離されている，(2) 良い天使の受ける至福は失っていない，また悪い天使の群れから引き離された，の二つに分かれる。そして唯一つ「罪に同調した」となっている古フランス語散文 (A) だけが，良い天使の受ける至福を失った，また良い天使の群れからも引離されている，となっている。

以上，小鳥たちが良い天使の至福を失なうのは，アングロ・ノルマン語の Voyage de Saint Brendan と Navigatio 系の古フランス語散文 (A) においてであり，その他の Navigatio 系 versions では彼らは良い天使の受ける至福を受けている。

この他にも次のような相違がみられる。霊的存在であるはずの天使が小鳥の姿に変えられ，この島にとどまっていなければならないのは一種の拘束である。すなわち罰である。Voyage 系がいつもこの島にとどまり，小鳥の姿でいなければならないのに対し，Navigatio 系ではそれは主の日と聖なる日に限られている。その他の日にはこのような拘束を受けていないという。たとえば Navigatio Sancti Brendani Abbatis の小鳥はこう言っている。

> Vagamur per diuersas partes aeris et firmamenti et terrarum, sicut alii *spiritus* qui mittuntur. Sed in sanctis diebus atque dominicis accipimus corpora talia qualia nunc uides et commoramur hic laudamusque aestrum creatorem. (*Navigatio* : Caput 11-41~44)
>
> (我々は送られてくる他の霊のように空中，天空，地上を動きまわる。しかし主の日と聖なる日にはあなた方が今見ているような鳥の姿になってここにとどまり創造主をたたえる)

この文の中の spiritus という語は古フランス語訳において，いろんな意味に解されている。たとえば si coume autre esperit qui sont issu hors de leurs cors (古フランス語散文 (B)) 「彼らの身体の外に出た他の霊のように」，Com autre angle (古フランス語韻文) 「他の天使のように」，aussi que li autre esperite qui sunt enuoiet (古フランス語散文 (A)) 「送られてきた他の霊のように」。Navigatio Sancti Brendani Abbatis においてこの spiritus

がどういう意味で使われていても，この島以外の無限の空間を動き回ることができるのは，彼らに与えられた神の恩恵であると考えられる。この恩恵は Voyage 系の versions では与えられていない。

贖罪者の姿

Navigatio 系では，小鳥たちは時課として詩篇を長々と詠じ続ける。そして彼らが歌う詩篇の冒頭が全て引用されている。小鳥たちが詠唱する姿をみてブラダンたちはこう思う。

> et uidebatur... illa modulatio et sonus alarum quasi *carmen planctus* pro suavitate (*Navigatio*: Caput ll-53~55)
>
> (その抑揚と羽音はやわらかさのため哀歌のように思われた)

あるいは Si. I. *plains de grant dolor* (古フランス語韻文，v. 502)「大きな悲しみのうめき声のように」。

これはまさに贖罪に服する者の姿である。Voyage 系はこれらの描写を詩篇の引用と共に全て省いてしまっているために，そこでは贖罪に服する小鳥の姿も同時に消えてしまった。したがって，罪も罰も Voyage 系より軽い Navigatio 系の方でこの贖罪者の姿が描かれているという結果になっている。

以上見たように，ブランダン物語の小鳥たちは「神の敵」ではない。彼らは「うぬぼれの罪」を犯さなかった。しかし神を選んで神のために戦うべきであったのに，そうしなかった。その中途半端な態度が原因で彼らは天から追放された。

天から追放されたこの中途半端な天使たちは，「うぬぼれの罪」を犯していないので地獄へは送られず，この地上の島を与えられた。ここには苦しみが全く存在しない。その上，Voyage 系では，これは美しい島であるので「小鳥たちの天国」と呼ばれる。アングロ・ノルマン語の Voyage de Saint Brendan

は小鳥たちの運命を島の木によって象徴的に表わしている唯一の version である。

この天使たちの中途半端な態度のあり方が version によって違っている。それは結局，罪を犯した後のサタンに仕えたと明記するものと何も示していないものの二つに大きく分けることができる。そして罰がそれに対応する。罪を犯した後のサタンに仕えたとなっている versions では，小鳥たちは良い天使に与えられる至福を奪われている（Voyage 系および古フランス語散文 (A)）。そして具体的には何も示していない versions では，小鳥たちは良い天使に与えられる至福を受け続けている（古フランス語散文(A)を除く Navigatio 系の全て）。そして Voyage 系では，彼らは常に小鳥の姿でこの島にとどまらなければならないのに対し，Navigatio 系では主の日と聖なる日以外は他の霊的存在と同じように自由に空中，天空，地上を飛びまわるという恩恵が与えられている。

結局 Voyage 系の方が Navigatio 系よりも，小鳥たちの罪と罰が重いということになる。以上がブランダン物語における中途半端な天使たちの取り扱いである。

註

(1) R. ITO : Navigatio Sancti Brendani Abbatis et Anglo-Normand "Voyage de Saint Brendan", La Navigatio est-elle "a mere odessey" ? Bulletin Annuel d'Etudes Françaises No. 14 の中でこの問題を取り扱った。

(2) Selmer は10世紀から12世紀まで18の写本を使用している。
古フランス語散文(A)は12世紀末，(B)は13世紀末の写本である。
古フランス語韻文は Gautier de Metz（13紀のフランスの詩人）の作品 Image du Monde に収められている。
アングロ・ノルマン語版は 6 つの写本（1200年から13世紀末）に基いている。
ラテン語韻文は14世紀の写本である。

(3) イタリックの *Navigatio* は Navigatio Sancti Brendani Abbatis, を *Voyage* は Voyage de Saint Brendan を示す。

(4) Bar F. Les Routes de l'autre monde p. 84参照。

(5) 写本の詳しい解説が Selmer の序文と巻末にある。

(6) «Elle (la béatitude des bons anges) consiste dans la vision du Dieu (Mat. XVIII, 10), dans le fait d'être en sa présence, de former sa cour (Hérb. XII, 22 ; Apoc. VII, 11), d'être au service de l'Eglise du Christ.» LA CRÉATION ET LE PÉCHÉ ORIGINAL p. 100 より。

テ キ ス ト

SELMER Carl : NAVIGATIO SANCTI BRENDANI ABBATIS University of Notre Dame, Indiana 1959 USA

WAHLUND Carl : DIE ALTFRANZOSOSCHE PROSAUBERSETZUNG VON BRENDANS MEERFAHRT 1900 Slatkine Reprints Genève 1974

JUBINAL Achille : La légende latine de s. Brandaines, avec une traduction inédite en prose et en poésie romane Paris 1836

WATERS Edwin George Ross : The Anglo-Norman Voyage of St. Brendan by Benedeit A poem of the early twelfth century 1928 Slatkine reprints Genève 1974

SHORT Ian & BRIAN Meerilees : Benedeit The Anglo-Norman Voyage of St. Brendan Manchester University Press 1979

MARTIN Ernst : DIE LAT. UBERSETZUNG DES ALTFRANZOSISCHEN GEDICHTES AUF ST. BRANDAN Zeitschrift fur deutsches Alterthum, NF. 16 1873. 289~322 Berlin

MEYER Paul : "Satire en vers rythmiques sur la légende de Saint Brendan" Romania 31 (1902) pp. 376~379

参 考 文 献

La Bible de Jérusalem CERF 1977

SATAN L'Ordinaire Desclée de Brouwer 1978

Dictionnaire de la Bible publié par F. VIGOUROUX Paris, 18 vols. 1926

A Dictionary of Angel incuding the fallen angels by Gustave DAVIDSON The Free Press, New York / Collier-Macmillan, London

Dictionnaire Infernal publié par Henri PLON 1863

A. Le BRAZ : La légende de la Mort chez les Bretons Armoricains Honoré Champion 1945 Paris

LODS M. Adolphe : De Quelques Récits de Voyage au Pays des Morts Académie des Inscriptions et Belles Lettres 1940 nov.

PIAULT Bernard : Création et le Péché original SPES 1960 Paris

STOKES Whitely : Mythological Notes Revue Celtique 2, p. 200.

DANDO M. : Les Anges Neutres CAHIERS D'ETUDES CATHARES Printemps 1976 IIe Série No. 69.

ダンテ：「神曲」寿岳文章訳，集英社